

寧楽書院開設百二十五周年
記念特別企画

奈良の大学を考える フォーラム

— 奈良県における
高等教育の明日を語る —

フォーラム実行委員会委員長

重松 敬一

第一部 フォーラム

十一月十八日は、本学の開学記念日である。本学は昨年、寧楽書院開設から数えて、百二十五周年を迎えた。そのことを記念し、十八日の午後、「奈良の大学を考えるフォーラム」が、本学将来構想委員会を中心とするフォーラム実行委員会主催、奈良県と奈良県教育委員会後援で開催された。会場となった奈良県文化会館の集会室は、開催時間の午後二時前より、大勢の参加者で満席となった。

フォーラムのねらいは、奈良の大学や奈良教育大学の役割について、広く、各界のみなさんご意見をいただき、話し合おうというものである。第一部「フォーラム」として、第二部 講演 赤井達郎前奈良教育大学学長「幕末明治の浮世絵」の二部構成で行われた。第二部に

ついては、次号「ならやま」で紹介したい。

基調報告と各界からのご意見

第一部は、基調報告、各界からのご意見、各界からのコメント、フロアー質疑の順で進められた。

基調報告は、柳澤保徳学長補佐から、奈良県の大学の全体像、高等教育の現状、高等教育の今後の課題などについて、報告がなされた。

つづいて、奈良女子大学の久米健次副学長、奈良県教育委員会の藤原昭教育長、高等学校から竹村隆奈良県高等学校校長協会会長、産業界から板橋知義奈良工業会専務理事、言論界から坂本久美奈良新聞社編集局長の五氏をお招きし、それぞれ各界からのご意見をいただいた。

大学の地域貢献、男女共学、地方分権、教員養成における地域と大学の組織的な連携、理工系を含む総合大学の必要性、産学協同、自国の文化に自信をもつ教育、インターンシップ事業の推進など、示唆に富むご意見をいただいた。

各界からのコメントと フロアー質疑

つづいて、各界からのコメントを、奈良先端科学技術大学院大学の小山正樹教授（附属図書館長）、奈良県立商科大学の土野敏教授（学生部長）、奈良工業高等専門学校生部長、奈良県民の立場から前田一郎氏（奈良市公民館運営審議会副会長）の各氏からいただいた。

技術が社会変化をもたらしていること。知識を暗記する教育から利用する教育への転換、そういったパラダイムの変更に対応した教員養成の必要性、グローバルイノベーション、ローカライゼーション、社会人入学、インターンシップ、学問を通しての人間形成などについて貴重なコメントが寄せられた。

最後に、フロアー質疑が行われた。県内には国立の理工系の進路先が少ない。技術立県の立場から共学の総合大学が必要である。大学院での現職研修は有益である。六年

課程の教員養成。子どもにも夢を与える教育の必要性。など意見が交わされた。

今後の課題と確かな方向性

フォーラムは、予定の時間を一時間ほど超過してしまおうという盛況のなかで、まとめの時間を逸えた。

大学は社会の変化に対応しなければならぬこと。今その質が問われていること。現役学生だけでなく、社会人を含めた生涯学習の場としての大学、地域支援のできる大学であること。理工系学部を含んだ、広く総合的な大学の構想を地元産業との連携など、地域の特性を生かした教育研究を展開していくこと。教員養成の充実、広く新しい教養の担い手を育成する大学であること。奈良県における高等教育をめぐる議論の継続、各大学がおこなっている改革努力についての積極的な情報発信が重要であること。などがまとめの項目としてあげられ、フォーラムを終えた。

